

富士養鱒場だより

第245号
令和2年5月号



静岡県水産・海洋技術研究所富士養鱒場 〒418-0108 富士宮市猪之頭 579-2 TEL:0544-52-0311

FAX:0544-52-0312 E-mail suigi-fuji@pref.shizuoka.lg.jp URL <https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/fuji/>

富士養鱒場長・就任にあたって

このたびの人事異動で、平井前場長の後を引き継ぎ富士養鱒場長に就任いたしました。歴代場長や諸先輩方が培ってきた業績を受継ぎ、微力ながらも全力を尽くしますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は富士養鱒場に勤務するのは、平成10年度から13年度までの4年間に続き2回目となります。当時は場内施設の建て替えとマス類の種卵・種苗生産・供給業務の民間移管が終了し、富士養鱒場として新たなスタートを切った時期でした。また養鱒業界におかれましては、長引く不況による市況の低迷と魚病被害、魚粉事情の悪化による飼料価格の高騰等により、生産者の経営も極めて厳しい状況に置かれていました。

あれから20年経ちましたが、全国的な管理釣り堀のブームによる活魚需要の増加、ご当地サーモンブームによる大型魚市場の活性化、海面養殖用種苗の需要増などの追い風が吹いています。その一方で生産者からは、以前からある魚病でも近年では質が変わって治りにくく、引き続き魚病被害が生産量の伸び悩む原因になっているという声を聞きます。こうした流れを受け、富士養鱒場としましては、疾病等の感染や侵入経路を把握する等の魚病対策技術の開発や、海水馴致方法や海水適応能の高いニジマス系統の開発を目指す研究に取り組んでおります。また数年前から取り組んできた低価格である低魚粉飼料でも良く育つニジマスの新品種を、遺伝情報を利用した育種により短期間で作出し、生産コストの削減を図るとともに、他魚種・他産地との競争力ある静岡県ブランドニジマスの増産に取り組む研究も進めていきます。これらの研究に加え、ニジマスの消費拡大に向けた新しい



消費スタイルの模索や魚病の予防対策、生産の効率化・省力化や出荷量増大への取組や、沼津地区を中心とする海面養殖業の魚病対策、河川・湖沼の内水面漁業における外来魚等による有用水産生物の食害防止対策の活動等を支援していきたいと考えております。

しかしながら本年2月から国内においても拡大し始めた新型コロナウイルス感染症により、飲食業界、観光業界は大打撃を受けており、消費の低迷から水産業界にもその影響は及んでおります。この対応が喫緊の課題であり、当面は業界を取り巻く情勢がどのように変化していくのか、見極めながら対処していくことが重要と考えられます。当场では時々の変化に柔軟に対応した普及活動を通して支援を行いたいと考えております。これまでと同様に職員一同、力を合わせて取り組んでいきますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

(場長 野田浩之)

平成31年・令和元年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態及び魚病被害のアンケート調査結果

静岡県内のサケ科魚類及び海産魚の養殖業者の方々にご協力いただいた平成31年・令和元年の生産実態及び魚病被害のアンケート調査結果を取りまとめましたので、概要を報告します。

方 法

県内でサケ科魚類及び海産魚の養殖業を営む経営体を対象にアンケート票を配付し、魚種ごとの生産量と生産額、魚種別及び疾病別の魚病被害量と被害額を調査しました。本調査の対象期間は平成31年1月1日から令和元年12月31日までの1年間です。

結 果

1 サケ科魚類（表1）

(1) 経営体数

延べ経営体数は53軒、実経営体数は31軒でした。

(2) 生産量

生産量は1,371トンで、前年比では96%となり、59トン減少しました。魚種別に見ると、ニジマスで前年比96%、ギンザケで同17%、イワナ

で同72%と減少した一方、アマゴで同135%と増加しました。

(3) 魚病被害状況

魚病被害量は169.0トンで、前年比では196%となり、82.8トン増加しました。魚種別に見ると、ニジマスで最も多く167.3トンとなり、生産量の13.4%を占めたほか、アマゴでは1.7トンとなり、同3.4%を占めました。

魚種別の主な発生疾病は、ニジマスでIHN、細菌性冷水病及びイクチオホヌス症で、アマゴでせっそう病でした。

2 海産魚（表2）

(1) 経営体数

延べ経営体数は38軒、実経営体数は19軒でした。

(2) 生産量

生産量は1,903トンで、前年比では110%となり、179トン増加しました。魚種別に見ると、マダイで前年比117%、ブリで同102%と増加した一方、マアジで同99%、シマアジで同97%と減少しました。

表1 サケ科魚類のアンケート調査結果

魚種	H31・R1					(参考)H30		
	経営体数 (軒)	生産量 (トン)	被害量 (トン)	生産量に対する 割合(%)	魚病 主な疾病	経営体数 (軒)	生産量 (トン)	魚病 被害量 (トン)
ニジマス	18	1,251	167.3	13.4	IHN、冷水病、イクチオホヌス症	18	1,298	71.0
ギンザケ	2	4	0.0	-		2	24	0.0
アマゴ	21	50	1.7	3.4	せっそう病	24	37	14.6
イワナ	6	28	0.0	-		6	39	0.6
その他	6	38	0.0	-		5	32	0.0
合計	53 (31)※	1,371	169.0	12.3		61 (33)※	1,430	86.2

※経営体数合計のカッコは実経営体数

表2 海産魚のアンケート調査結果

魚種	H31・R1					(参考)H30		
	経営体数 (軒)	生産量 (トン)	被害量 (トン)	生産量に対する 割合(%)	魚病 主な疾病	経営体数 (軒)	生産量 (トン)	魚病 被害量 (トン)
マアジ	8	343	29.0	7.4	ビブリオ病、連鎖球菌症(α1)	9	347	25.5
マダイ	12	1,216	18.1	0.4	エドワジエラ症	12	1,038	4.6
ブリ	4	265	22.5	17.3	連鎖球菌症(α2)、ノカルジア症	3	260	45.0
シマアジ	3	36	7.1	2.7	連鎖球菌症(α2)	3	37	1.0
海面その他	4	20	1.2	6.0	連鎖球菌症	3	25	0.0
陸上ヒラメ	3	21	0.0	-		3	12	0.2
陸上その他	4	2	0.0	-		3	5	0.0
合計	38 (19)※	1,903	77.9	4.1		36 (20)※	1,724	76.3

※経営体数合計のカッコは実経営体数

(3)魚病被害状況

魚病被害量は77.9トンで、前年比では102%となり、1.6トン増加しました。魚種別に見ると、マアジで最も多く29.0トンとなり、生産量の8.4%を占めたほか、ブリ22.5トンとなり同8.5%、マダイでは18.1トンとなり同1.5%を、それぞれ占めました。

魚種別の主な発生疾病は、マアジでビブリオ病及び連鎖球菌症、ブリでは連鎖球菌症及びノカルジア症、シマアジでは連鎖球菌症でした。

ブリとシマアジでは昨年と同様に連鎖球菌症（ α II型）の被害が大きい結果となりました。

これらの結果を基に、少しでも魚病被害を減らすための取組を、養殖業者の皆様と進めていきます。

なお、本アンケート結果の詳細は、静岡県水産技術研究所「平成31年度事業報告」に掲載します。
(池田卓摩)

人事異動

(令和2年4月1日付け)

(転出)	場長	平井一行	→	退職
	主査	鈴木邦弘	→	水産振興課水産振興班 主査
	主任	木南竜平	→	水産・海洋技術研究所開発加工科 上席研究員
(転入)	場長	野田浩之	←	水産技術研究所深層水科長
	主査	佐藤孝幸	←	水産振興課 主査 (静岡信漁連へ派遣)
	技師	池田卓摩	←	水産技術研究所資源海洋科 研究員

転入者自己紹介

今春から2年ぶりに富士養鱒場に出戻りました佐藤孝幸（サトウタカユキ）です。3月まで海沿いの焼津にある静岡信漁連融資部へ降下して勉強に励み、少しだけ頭を大きくして再びお山へ遡上してきました。

前任の先輩普及員が築き上げた実績と信頼の前に重圧を感じますが、養殖業、内水面漁業に携わる皆様の役立てるよう、ミズカビだらけになるまで泳ぎまわる覚悟です。

よろしく願いいたします。



佐藤 孝幸

はじめまして、焼津の水産技術研究所資源海洋科から異動して参りました、池田卓摩（イケダタクマ）と申します。富士養鱒場では、普及指導員として主に魚病の担当をさせていただきます。

これまでは、サクラエビの資源量推定に関する研究をしていました。養殖に関してまだ未熟ではありますが、積極的に現場へ足を運び勉強したいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。



池田 卓摩

令和2年度 業務紹介

令和2年度の人事異動にともない、当場では下記の体制で業務に取り組んでいきます。なお、今年度から組織名称が『水産技術研究所』から『水産・海洋技術研究所』に変わりました（研究科、分場等の体制に変更はありません）。

氏名	職	当場 通算年数	主な担当業務
野田浩之	場長	4年	富士養鱒場業務の総括
古郡良輔	主査	3年	予算・庶務、観覧業務、庁舎等の保守管理
松山 創	上席研究員	6年	試験研究の企画調整、 サーモン養殖のための優れた系統の作出研究
中村永介	上席研究員	6年	重要疾病のリスク管理技術の開発（IHN、ラッシュ）
佐藤孝幸	主査 (普及指導員)	4年	普及指導（「紅富士」生産支援、6次産業化、広報）
池田卓摩	技師 (普及指導員)	初	普及指導（養鱒種苗生産、内水面漁業） 魚類防疫対策（内水面養殖、海面養殖、内水面漁業）
植松久男	非常勤職員	51年	試験研究補助、飼育管理、場内管理
山田敦司	非常勤職員	2年	試験研究補助、飼育管理、場内管理

富士養鱒場の降水量と湧水量

月	降水量(降水日数) : mm (日)		湧水量 : 万 t / 日	
	今年	過去平均*	今年	過去平均*
2	83 (9)	98 (8)	3.50	3.16
3	189 (11)	209 (10)	3.18	3.48
4	232 (8)	240 (10)	3.90	4.25

* 前年以前の20年間平均値

日誌

令和2年2月	令和2年3月	令和2年4月
4日 一般研究評価会（焼津）	1日 育て鱒ター放流会※（市内）	3日 業務連絡会分場長会議
5日 業務連絡会分場長会議 （焼津）	3日 業務連絡会分場長会議 （焼津）	（焼津）
6-7日 アユ資源研究部会（東京）	5日 紅富士生産体制強化会議 （市内）	8日 普及月例会（焼津）
19日 全国養鱒技術協議会 運営委員会（東京）	9日 河津川アユ遡上調査（河津）	10日 防災担当者連絡会議（富士）
18日 やるぞ内水面報告会（東京）	11日 ニジマス生産者会議（市内）	15日 例月出納検査（焼津）
20日 普及月例会（焼津）	12日 普及成果報告会（焼津）	17日 温水ヒラメVNN検査（場内）
21日 養鱒業若手研修会（市内）	19日 猪之頭公園運営協議会 （市内）	24日 紅富士生産体制強化会議 （市内）
26日 第262回技連（浜松）		30日 業務連絡会分場長会議 （焼津）

※3月1日に「第31回にじます祭」の開催が予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため中止となり、「育て鱒ター放流会」のみが行われました。